

波荒くとも

小川未明

青空文庫

なまりいろ鉛色をした、冬の朝でした。往来には、まだあまり人ひとり
 通りがなかったのです。広い路の中央を電車だけが、潮
 の押しよせるようなり声をたて、うす暗いうちから往復し
 ていました。そして、コンクリート造りの建物の多い町の中は、
 ひのぼのまえさむ日の上らない前の寒さは、ことに厳しかったのです。
 十三、四の小僧さんが、自分の体より大きな荷を負って、ちよ
 うど押しつぶされるようなかつこうをして、自転車に乗って走
 ってきたが、突然ふらふらとなつて、自転車から降りると、

そのまま大地の上へかがんでしまいました。そこは石造りの銀行の前でした。堅く閉まったとびらが、こちらを向いてにらんでいるほか、だれも見ているものがありません。少年は、しばらくじつとしていたが、そのうちはうようにして、やっと背中せなかの重い荷物を銀行の入り口の石段の上に乗せて、はげしく締めつける胸の重みをゆるめたが、まだ気分が悪いとみえて、後ろ頭あたまはこを箱につけて仰向けになったまま目を閉じたのでした。小さな肩かたのあたりが、穏やかならぬ息づかいのためいにふるえています。小僧こぞうさんは、こんなにして倒れていたけれど、ときどき思い出したように電車でんしゃのうなり音が訪れてくるほかは、だれもそばへよつてきて、ようすをたずねるものもありませんでした。

この少年しょうねんは去年きよねんの秋あき、田舎いなかから叔父おじさんを頼たよつて上じようき京ようしました。そして、ある製菓工場せいかにこうじようへ雇やとわれてから、まだ間まがなかつたのです。今朝けさも取次店とりつぎてんへ品物しなものをとどけるために出でかけたのでした。二、三日にちまえ前からかぜぎみで寒さむけがしていただけですけれど、すこしぐらいの病びようき気きでは仕事しごとを休やすむことができません。彼かれは、無理むりをして自じてんしゃ転車はしを走はしらせたのです。すると、冷れい水すいを浴あびるように、悪寒おかんが背筋せすじを流ながれて、手足てあしまでぶるぶるとふるえました。

「こんな病びようき気きに、負まけてなるものか。」

彼かれは、歯齶はがみをしました。いくら力ちからを入れても、力ちからの入はいらない足あしをもどかしがりました。すると、今こんど度は体からだが火ひのように熱あつくな

つて、耳みみが、ガンガンと鳴なり、目めの中なかまでかつかとしてきました。これはかなわぬと思おもううちに、足あしが重おもくなつて、もう一歩ぼも前まえへふみ出だせなくなつてしまつたのです。それから後あとのことは、すこしもわかりませんでした。

「雪ゆきのあるのは、ここだけだ。村むらの往おう来らいへ出でれば、人ひと通とどりがあるし、歩あるくのが楽らくになるからがまんをしろよ。さあ、私わたしの後あとについてくるだ。」

重おもい荷にを背せ負おつて、先さきに立たつて母は親はおやが歩あるきました。少しょう年ねんは後あとからついていきます。母は親はおやの負おつている行こう李りには、少しょう年ねんの着き物ものや、いろいろのものが入はいつていました。

「東京は、雪がないというから、結構なこつた。あつちへ

着いたらすぐに便りをよこせよ。」

「叔父さんが、停車場へ迎えに出ていてくれるかい。」

「待つていてくださるとも。それでも、所番地書いた紙をなく

すでないぞ。」

峠を上ると、小鳥が、そばの枯れ枝に止まってさえずつていま

した。

「つぐみみたいだなあ。」

少年は、しばらく立ち止まって、それに見とれていました。

こんな小鳥といつしよに山の中で暮らしているほうが、東京

へいくよりは幸福のように感じられたのです。いつのまにか母

はおやすがたとお親の姿が遠くさきへいつてしまいました。少年は驚いてその後を追ったが、どういものか足が重くて、なかなか動きません。いくら早く走ろうとしても足が進みません。ただ気が急いで、体をもだえているばかりでした。

小僧さんは、苦しいうちに、こんな夢を見ているのでした。

二

町の商店に、女中をしているみつ子は、ちようどお使いに出て、銀行の前を通りかかりました。

「あら、小僧さんが、どうしたんでしょう。」

みつ子は、少年しょうねんのたおれているところへきました。みると、その顔色かおいろが真っ青ま さおになっています。そして、苦しくるそうに息いきを失うていました。

「ねえ、気分きぶんがわるいの？」と、彼女かのじよは、聞ききました。けれど、小僧こぞうさんは、なんとも答こたえませんでした。

「気分きぶんがわるいの？」と、彼女かのじよは、こんど耳みみもとへ口くちを近づちかけて、いいました。けれど、小僧こぞうさんには、答こたえるだけの気力きりよくがなかったのです。

「かわいそうに、こんな大おおきな荷物にもつを負おわせて、寒さむいのに働はたらかすからだわ。」

「重おもいのでしよう。私わたし、あんたといっしょにお家うちへ行ってあげる

わ。そして、ご主人によく話してあげますから、お所をおつしやい。」

こういった、彼女の目の中には、いつか涙がわきました。しかし、少年は意識がないのか、返事がなかつたのです。

「きつと、病気なのかもしれない。それなら早くお医者に見せなければ……。」

彼女は、自分がお使いに出て、主人の待っていることも忘れていました。

みつ子は、このことを交番に届けなければならぬと考えました。さつそく交番の方へ走っていきました。彼女のいうことを聞いた、巡査さんは、

「朝飯あさめしを食たべずに出でて、つかれたのではないか。」と、軽かるく想そ像うぞうしました。

「いえ、顔色かおいろが青あおく、たいへんに苦くるしそうです。」と、みつ子こはいいました。みつ子こは、今年ことし十六じゅうろくになったのです。

「いくつぐらいの子供こどもかね。」と、奥おくの方ほうにいた、もう一人ひとりの巡査ゆんさが、たずねました。

「十三、四よの、まだ小ちいさい子供こどもです。」

彼女かのじよは、ここう答こたえると目頭めがしらが熱あつくなりました。自分じぶんの弟おとうとの姿すがたが浮うかんだからです。

「急病きゅうびょうかな。」と、その巡査おまわりさんは、すぐたに起あち上あがつて、交番こうばんから出でました。

かのじよ
彼女は、銀行ぎんこうの前まえへその巡査おまわりさんを案内あんないしました。このときは、すでに四、五人にんも小僧こぞうさんのまわりに立たっていました。巡査おまわりさんは、小僧こぞうさんの顔かおをのぞきこむようにして、なにかたずねていたが、少年しょうねんの言葉ことばは、そばにいるものにさえ聞ききとれませんでした。

巡査おまわりさんは、ふいに顔かおを上げ、左右さゆうを見まわしながら、いきました。

「だれか、手てをかしてくれませんか。病びょう人にんを交番こうばんまでつれていくのだが。」

「よし、おてつだいしましょう。」
ろうどうしゃ
労働者おとこふうの男つとと、勤め人にんふうの若者わかものが、前まえへ出でました。

ろうどうしや 労働者は、しょうねん 少年の負っているお菓子かしの入りはい箱はこを、勤つとめ人は、じてんしや 自転車を、そして、おまわり 巡査さんは、こぞう 小僧をだくようにして、つれていきました。

みつ子は、もうこれだいいじょうぶだと思つて、ぎんこう 銀行の前まえからはなれたのです。

三

みつ子は、ある 歩きながら、じぶんおとうと 自分の弟のことを思い出しだてました。ちようど年としごろもあのこぞう 小僧さんと同じくらいです。ゆき 雪まじりの北き風たかぜの吹ふきつける窓まどの下したで、おとうと 弟は父親ちちおやのそばでわらじを造つくった

り、なわをなったりして居るのであらう。下を向いて、だまつてい
る父親は、

「すこし休めや。」と、ときどき顔を上げていうであらう。そし
て、炬に枯れ枝や、松の落ち葉などを入れるであらう。しばらく、
青い、香りのする煙が、もくもくとして居るが、そのうちにぱつ
と火が燃えついて、へやのすみまで明くなる。遠くで、からすの
鳴き声^{なごえ}がする。弟は、自分から送った少年雑誌を出して、さ
も、大事にして楽しそうにして開いて見る。弟は、めずらしい写
真に見入ったり、また書いてあるおもしろそうな記事に、心を
奪われて、いろいろの空想にふけるであらうと思つたのでした。
「あの小僧さんは、あれからどうなつたらう。」と、彼女は、

一日仕事をしながらも思っていました。

そのうちに日が暮れて、その日の用事が終わると、彼女は、自分のへやへ入って、このあいだ、弟の清二からきた手紙を出してなつかしそうに、また読み返していたのです。

「姉さん、僕、雪の消えるのを待っているんだよ。そうしたら今年はお父さんと裏のかや山を開墾して、畑を造るのだ。枯れ草に火をつけてたいたり、根を掘り起こしたりするのが、いまから楽しみになんだ。そして、兄さんが、凱旋していらつしやるまでに豆をまいたり、芋を作ったりしておいて、兄さんをびつくりさせるんだ。なぜなら、兄さんだって、あのかや山には、ちよつと手がつけられなかったのだからな。姉さん、僕は、満洲へで

も、どこへでもいけるよ。僕ぼくがいくときは、隣となりの徳とくちゃんも、い
つしよにいくというんだ。二人ふたりでなら、うちのお父ととさんも許ゆるして
くださると思おもっている。姉ねえさん、なにか満まん洲しゅうのことを書かいた
本ほんがあつたら、どうか送おくってください。僕ぼく、とても見みたいのだけ
ら……。」と、書かいてありました。

みつ子こは、いつも弟おとうとの元げん氣きでいるのをうれしく思おもいました。そ
して、たえず希き望ぼうにもえているのをなんとなくいじらしく思おもいま
した。しかし、これからの世よの中なかへ出でて、ひとり立たちしていくに
は、どこにいても、今朝けさの小僧こぞうさんのように辛つらいめにもあうこと
があるだろう……。そして、それに打うち勝かつていかなければなら
ぬのだと思おもうと、また、心こころの中なかが暗くらくなるのでした。

「どうぞ、神さま、小さな弟や、弟のような少年をば助けてやつてください。」と、みつ子は、へやの中でしばらく瞑目して合掌していたのであります。

翌日、みつ子は、用達の帰りに、わざわざ交番へ立ち寄りしました。小僧さんのようすを聞きたかったからです。やはり病気をがまんして、重い荷を負って出たためにたおれたのだということでした。そして、小僧さんは、主人を呼び出して引きわたされたというのであります。

「小さくて、家のため、親のために働くような子供は、みんな感心な子供だから、よくめんどろをみて、しんせつにしてやらなければならぬと、主人にいいわたした。」と、巡查さんは、

いわれました。

「ほんとうに、そうです。」と、みつ子は、深く感じたので、丁寧に頭を下げて、交番を出しましたが、道を歩きながら、もし、その主人というのが、薄情で、もののわからぬ人物であつたらどうであろう。自分のしかられたことを恨みにもつて、かえつて哀れな小僧さんをいじめはしないかしらと考えると、やさしいみつ子の心にはまた新しい心配が、生じたのでした。

「そんなことはないわ。そんなことがあれば、またしかられるでしょう。きつと、主人は、ああ自分が悪かった、不注意だつたときとつて、これから、あの小僧さんや、ほかの小僧さんたちをかわいがるにちがいない。みんな日本人ですもの……。」

彼女の、自分の心配が、つまらない心配であることを知ったのであります。

四

ここは、町に近い郊外でした。ある長屋の一軒では、父の帰りを待っている少年がありました。いつもいまごろは、弁当と当箱を下げて会社からもどってくる父親の姿を彼方の道の上に見るのであるが、今日は、まだそれらしい姿が見えません。「早く帰っていらつしやればいいに、三ちゃんが、病気できているのになあ。」と、少年は気をもんでいました。仕事の都

合ごうで二電車ふたでんしゃばかりおくれた父親ちちおやは、黒くろの外がい套とうに、鳥打帽とりうちぼうをかぶつて急いそいできました。むかえに出でている倅せがれを見みつけると、
「吉雄よしおや待まっていたのか、さあ、寒さむいからお家うちへ入はいんな。」とい
いました。

「三さんちゃんが、病びよう気きになつてきて寝ねているよ。朝あさ、自じ転てん車しゃで走はしっているうちに、気き分ぶんがわるくなつて、たおれたんだつて。」
「なに、道みちでたおれたんだつて？ どんなくあいだ、医い者しゃに見みてもらったか。」と、父ちち親おやは、驚おどろきました。

「工場こうばの医い者しゃに見みてもらったのだから、お薬くすりびんを持もつてきたよ。」
「熱ねつがたかいか。」と、父ちち親おやは、急せきこ込んで聞ききました。

「お母^{かあ}さんが氷^こまくらをしてあげたら、すこし下^さがったようだ。

いま、よく眠^{ねむ}っている。」

小僧^{こぞう}さんは、工場^{こうば}に寝^ねているところがないので、叔父^{おじ}さんの家^{いえ}

へ帰^{かえ}されたのです。叔父^{おじ}さんの家^{いえ}は、やはりろくろく寝^ねるところ

もない狭^{せま}い家^{いえ}でありました。そして、貧^{まず}しい暮^くらしをしていまし

た。小僧^{こぞう}さんの名^なは三郎^{さぶろう}といつて、田舎^{いなか}から、この叔父^{おじ}さんを

頼^{たよ}ってきたのです。そして、いまの製^{せい}菓^か工場^{こうじよう}へ見習^{みなら}い小僧^{こぞう}に

入^{はい}ったのでした。しかし叔父^{おじ}さんも、叔母^{おば}さんもやさしい人^{ひと}であ

ったし、二つ年^{とし}下^{した}の吉雄^{よしお}くんもすぐ仲^{なか}よしになつたので、三^{さぶろ}

郎^{ろう}は、公休^{こうきゆうび}日には、かならず叔父^{おじ}さんの家^{いえ}へ帰^{かえ}るのが、なに

よりの楽^{たの}しみだつたのです。叔父^{おじ}さんは、玄関^{げんかん}を上^あがると、

「三郎が病気で、きているつてな。」といいました。

「流感らしいんですね。肺炎になるといけないから、いま

湿布をしてやりました。」と、叔母さんが、答えました。

「朝、寒いのに自転車で走ったからだ。大事にしてやれば、早

くなおるだろう……。」

「人中へ出ていますと、気を使って、がまんをしますし、まだ

年のいかにないのに、かわいそうです。」

「なにしろこういう世の中だから、体も、心も、よほど強くなけ

れば打ち勝つてはいかれない。」

「三ちゃん、親戚だけでも遠慮して、いじらしいん

ですよ。」と、叔母さんがいいました。

叔父おじさんは、足音あしおとをたてぬようにして、三郎さぶろうの寝ねているへ
 やへ入はいりました。三畳じようのへやには、すみの方ほうに吉雄よしおの机つくえが置おいて
 あつて、そこへ床とこを敷しいたので、病びようにん人のまくらもとには、薬くすり
 びんや、洗面器せんめんきや、湯気ゆげを立たたせる、火鉢ひばちなどがあつて足あしのふ
 み場ばもないのです。しかし、ここばかりは、冬ふゆとも思おもえぬ暖あたかさ
 でありました。叔父おじさんは心配しんぱいそうに、病びようにん人の顔かおをのぞき
 こみました。よく眠ねむっています。

「顔色かおいろはいいようだ。これならだいじようぶだ。」

叔父おじさんは、へやから出でると、こういいました。

昨日きのうあたりから、あたたかな風かぜが、吹ふきはじめました。もう春はる

がやってくるのです。吉雄よしおの学年がくねん試験しけんも終おわつて、来月らいげつから

は六年^{ねんせい}生^{せい}になるのでした。三^{さぶろう}郎^{ろう}は、また病^{びよう}気^きがなおつて、
 これも来^{らい}月^{げつ}のはじめから、工^{こう}場^ばへ帰^{かえ}ることになりました。二^{ふたり}人^{にん}
 は、ここ数^{すう}日^{じつ}間^{かん}を楽^{たの}しく遊^{あそ}ぼうと緑^{みどり}色^{いろ}の芽^めが萌^もえ出^でた堤^{つみ}の
 上^{うえ}まで、出^でてきたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学五年生」

1939（昭和14）年3月

※表題は底本では、「波《なみ》荒《あら》くとも」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

波荒くとも

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>